

237

こんにちは。塾長の大井です。

6期生受験戦記第22回です。

次は小3の第1回授業からTOPに通い続けたHさんです。本当に気まぐれでただTOPが好きで足を運んでたような、やりきらない日々でした。

「H、情けなかったよずっと。今日やった最後の最後の過去問も空欄だらけだった。でもHはTOPが好きだったろ。授業が好きだったろ。だからTOPの日々を人生の空欄なんかにするな。お母さんが『最後まで情けなくてあの子には中学受験は早かったですね』って言ってた。でも先生は『お母さん、終わるまで待つてやって下さい。Hさんの受験の価値は全部終わるまで分かりません。』って言ったぞ。いくら今日デタラメやったって、明日はメチャクチャがんばるって信じるぞ。」

5人目は小6から入ったAさんでした。考えることを嫌い、作業的な勉強が目立つ子でした。ほとんど全てのテストでクラス最下位の成績でした。それでもTOPでの日々はAさんを受験生へと成長させました。

「ずいぶん見学ポジションにいたな。それでもAは最後にTOP生になったよ。ちゃんと一員になったじゃないか。今のAなら取れんじゃないか。何度も何度も日本一の塾に通ったって言った、そんなAはいい思いするって勝利の匂いがプンプンしてる。先生には誰よりもそれが分かる。」

Aさんも一言一言にうなずいて聞いていました。

6人目はみんなにイジられ愛されてきたHさんと同じく小3からの生え抜き、Gくんです。1/25の立教新座でサプライズで応援に行くと、嬉しかったようで「先生…！！」と泣いていました。

「G、すごく素直でいい子だよ。それはみんな知ってる。でも勝負はそれだけじゃダメだ。何先生の顔見て泣いてんだよ？ピッチの上であんな涙流すヤツがいるか。その時点で負けてる。でも東邦での文系は本当にすばらしかった。あの掛け値なしにすばらしい答案を明日城北でもう1回やってこい。必ずできるよ。やれた1があるからな。」

式の初めから泣き続けていたGくんはそれでも何度も返事しました。

(第23回につづく)

2021年11月10日

大井 雄之